

戦時性暴力の「モデル被害者」言説に対する抵抗を見出すために

——セカンド・レイプ言説による新たな抑圧をめぐる一考察——

特定非営利活動法人 社会理論・動態研究所 猪股祐介

1 目的

本報告の目的は、満洲開拓団の女性団員に対するソ連兵による強姦被害について、「モデル被害者」言説が複合化していることを提示した上で、それがモデル被害者にあてはまらない被害女性や「関与者」（加害者ではないが関与した者）男性の抵抗をいかに抑圧するかを明らかにすることである。モデル被害者でない被害女性の語りとして「犠牲者言説」の反復を、「関与者」男性の語りとして「被害女性に対する贖罪言説」を扱う。

2 方法

分析対象として、主に被害女性・関与者男性の証言、開拓団誌収録の手記、そして報告者によるインタビュー及び参与観察の記録を用い、モデル被害者言説を提示する目的で黒川開拓団に関する新聞・雑誌記事や論文等も用いる。

分析方法は上記データを上野式 KJ 法で整理した上で、質的データ分析の有力な方法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチを中心に適宜言説分析の方法を用いる。

3 結果

黒川開拓団のモデル被害者言説には次の 2 つがある。1 つは「開拓団を救うためにソ連将校の性的相手を自発的に受け容れた」とする犠牲者言説である。いま 1 つは被害女性が犠牲者言説によって抑圧され沈黙を強いられてきた「二重の被害者」であるとする「セカンド・レイプ言説」である。前者は主に元団員（特に幹部）により引揚直後から、後者は非当事者により近年構築されている（拙稿 [2008] 「語り出した性暴力被害者」上野千鶴子他編著『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店もその一つ）。

セカンド・レイプ言説により抑圧される語りとして、被害女性の犠牲者言説の反復と関与者男性の贖罪の語りがあり、両者による抵抗が否認される問題を明らかにした。

セカンド・レイプ言説は被害女性による犠牲者言説の反復を「犠牲者言説による抑圧」として批判し、犠牲者言説に対する抵抗たり得る可能性を排除する。また関与者男性の贖罪の語りを自己正当化に過ぎないと批判し、犠牲者言説により「男性性の喪失」を回復するにとどまらない、男性性が形成する暴力に対する抵抗たり得る可能性を排除する。

4 結論

「モデル被害者」言説は当事者による犠牲者言説に非当事者によるセカンド・レイプ言説が折り重なり複合化しており、後者は当事者、なかでも「犠牲者言説を反復する被害女性」や「贖罪を図る関与者男性の抵抗」を否認する新たな抑圧を生んでいる。